

# 府がくやくたより

No2 平成24年 7月

報告：副会長 大村 洋子

薬物乱用防止教室講習会 平成24年6月28日 キャンパスプラザ京都

講演

青少年の薬物乱用の実態と薬物乱用防止教育の在り方

兵庫教育大学大学院学校教育研究科 教授 鬼頭 英明

\* 青少年の6つの危険行動

- 1、故意または不慮の事故に関する行動
- 2、喫煙
- 3、飲酒及び薬物乱用
- 4、望まない妊娠、HIVを含む性感染症に関係する性行動

5、不健康な食生活 6、運動不足 \* 6つの危険行動は相互に関連性が強い

・喫煙をしていたら、その他の危険行動と関連性が高い(飲酒、大麻、コカイン…)

\* 薬物乱用防止教育を進める重要な視点

・第1次予防の視点：依存性薬物を使用するきっかけそのものを除いたり、各個人がきっかけとなる誘因を避ける、あるいは拒絶することができるようになることを目標とする。

\* 高校生における違法薬物乱用経験率： 同じ学校で調査を行う

高1(2004年)より高3(2006年)の時のほうが、薬物全体の経験率が上がった。

\* 学校での薬物乱用防止教育の影響(10代~20代)

- ・学校で薬物乱用防止教育を受けて、とても多くの学生が影響をうけている。
- ・薬物乱用に対する認識・学習ありと比べて学習なしのほうが、また、年齢が上がるにつれて、迷惑をかけなければ個人の自由という認識が、増えている。
- ・薬物に対しての印象・小学年高学年は否定的な印象が強い。高校生になるにつれて否定的な印象が下がってくる。

\* 薬物に対して否定的な認識を、継続できる力を養う事が大事である。

## \* 脅し型健康教育

誇張された動物実験などを見せたり話したりして恐怖心を引き起こし喫煙などの危険行動をとらないようにさせる事を期待して、実施される健康教育。

## \* 脅し型健康教育が長期的に見れば、逆効果となる理由

- ① 思春期以前の子供達の志向は具体的で、見た事をありのまま受け止める。しかし、思春期が進むにつれて思考はより複雑化し、いくつかの情報を比較検討して、意志決定するようになる。(社会や大人に対する反抗心が強い青少年においては、とりわけ危険性が高い)
- ② 指導内容の中にあまりにも非現実的なメッセージが含まれていた場合、青少年が指導内容全体の信ぴょう性を疑う恐れが高い。

## \* 薬物乱用防止教育にあたって強調すべき点

- ① ほとんどの若者は薬物を乱用していないこと。
- ② 薬物乱用の可能性があるかないかという観点で生徒を区別しないこと
- ③ 薬物に関する情報はセンセーショナルに表現されるべきものでないこと
- ④ 薬物を乱用しないことが生徒自身の健康・安全のみでなく地域社会の健康・安全につながるものであること
- ⑤ 教材には少なくとも最近3、4年の科学的に信頼できるデータを使用
- ⑥ 児童生徒の年齢、興味、ニーズなど発達段階を踏まえた適切な情報(小学生には難しい言葉を言い換える 依存→やめられなくなること)(高校生には、脅かし型教育は効果なし。実験だと冷めて見ている)

## \* 薬物乱用防止教育における不適切な教材

- ① 児童生徒の薬物乱用に関する行動について、頭がスカーツとするなどいいわけの口実を与えるような教材
- ③ 児童生徒に違法薬物の入手、調整、使用法を教えるような図書、ビデオ
- ④ 薬物乱用者やアルコール依存症の患者の更生・社会復帰のための教材特に著名人などの例を用いたローモデル(例：ダルクの人の話)

## \* 新しい学習指導要領

中・高・・・医薬品教育と、薬物乱用とは、区別してそれぞれの単元で取り扱う。